



大学共同利用機関法人

人間文化研究機構

## 人社系研究評価をめぐる論点整理

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
国立歴史民俗博物館  
後藤真

## 後藤からのいくつかの話題提供 はじめに

- いわゆる「研究評価」のために考えなければならないこと
- 研究評価に関しては、さまざまな動きのある中でどうしても大きな方向性に依存しがち（Top10%? Scopus? PeerReview はたまたまた大学ランキング）
- しかし、本来はこれらの論点を議論するときには、いくつかの整理が必要なはず→それを踏まえて考え直すことで、評価の議論も進展する、かも

# 大前提！！

- 研究評価は究極的には何のために行われるのか  
→ (分野問わず) 研究をさらに進展させるため
- 個別の議論に夢中になり、この目的を見失うことは避ける必要あり
- 「責任ある」研究評価のためにも

## この目的に対して、どの側面から研究評価を使うのか？

- プロジェクトの進捗？（時間比較）
  - 目標値に対して一定の割合進んでいるか？（量的）
  - 一定の評価を得ることができているか？（質的）
- 機関間比較？
  - 論文数比較？（量的／質的かつ数的）
  - ピアレビュー評価など（質的かつ記述的）
- 強み探し？（弱点補強？）
  - アウトプット多様性 分野内特性 （インプット多様性も）

# 人社で「ほしい情報」は何か？

- 本来は、利用目的に応じて指標を選ぶわけだが…実際には足りてないものだらけなので
- プロジェクトの進捗？
  - 目標値に対して一定の割合進んでいるか？（量的）  
論文の量
  - 一定の評価を得ることができているか？（質的）  
論文の質（引用率？）の上昇？
- 機関間比較？
  - 論文数比較？（量的／質的かつ数的）  
論文の量 書籍の量 これに付随する引用など
  - ピアレビュー評価など（質的かつ記述的）  
レビュアーの状況（多様性など）
- 強み探し？（弱点補強？）
  - アウトプット多様性 分野内特性（インプット多様性も）  
アウトプット媒体の状況（媒体の多様性 媒体内部の多様性 例：iMD）  
情報 インプット多様性（e-CSTI?）

人文の中での詳細な分野別

## 足りない情報は何か？

- 情報収集可能なデータソースはあるのか？
  - ある場合には、どこまでなら可能でどこからは困難か？  
コスト的側面：○ 技術的側面：△ データの性質による面：×
  - ない場合には、新たに取得するエネルギーはどれぐらいになりそうか？
- 第三者データと、研究者自己申告
  - 自己申告データは
    - 網羅性が高い ほしい情報を入手できる
    - × 入手コストがとにかく高い 不揃い 「見栄を張る」
  - 自己申告データ以外で取得する方法から考える必要性

# As is と To Be

- 今、必要なものと、将来必要なものを切り分けて議論する
  - とにかく可視化して危機への説明材料とするもの
  - 10年後を目指して、作り上げるべきもの
  - ※例えば、人文系論文引用分析はOCR + AIで可能になるかもしれないが、コスト面や「取得範囲の共有」で時間はかかる
  - 同様に、「そもそも研究評価なんて不要」という「べき」の議論は当然ありうるが、現実には対応できない また、研究評価は自然科学と同様に絶対に対応すべきなのは、短期的にはそうだが、長期的にそれでいいのかは意識すべき
- 最終目的を見つつ、今やるべきことは、（遠回りであっても）最終目的につなげるように考える必要性がある